

病児保育の必要性を考える

最近、日本外来小児科学会が福岡県で開催され、「**実践病児保育、その問題点を解明する**」というシンポジウムに参加しました。

子どもが病気になった時の親の負担は大きいものがあります。そのため出産や育児を躊躇することが少なくありません。クリニックでは病気の診断、治療方針を決めますが、その後の子どものケアは親まかせです。そこで小児科医の新たな仕事が**病児保育**で、これは究極の子育て支援であり、**育児讃歌に繋がる**ということでした。

那覇市では「安謝小児クリニック」と「こくらクリニック」のたった2か所の医療機関併設型があります。浦添市では現在ゼロです。

なぜニーズがあるのに広まらないのでしょうか？！**スタッフ（看護師、保育士など）の確保と研修、稼働率の確保、収入の安定**など様々な問題点があるからです。

施設建設費、改修費や運営の安定化と病児保育士の待遇改善など**本来の保育施設として認定されればこれらは解決**しますが、現在は「地域子ども子育て支援13事業」の一環で手当が薄いようです。

行政がもっと病児保育に力を入れてくれれば、健全運営への道が開け、小児科医が参入できる病児保育施設が増え、辛い育児から楽しい育児に繋がり、**少子化問題を解決する一手**となると思います。

さて、**病児保育室で最も懸念されること**は、**お互い間の感染**です。感染性胃腸炎や溶連菌感染症など、**厳重な隔離を行わなくても適切な管理でクリア**できるもの、またRSウイルス感染症など**隔離が必要**と思われるものなど、現在の感染症ガイドラインで対処できています。

但し、病児保育室内で多く見られる感染症は、一般の保育園でも蔓延しており、どこで感染したかを確定するのは困難ということです。

もう一つ、**重大な事故防止**に関しては、インターネットを利用して、**これまでの事例を皆で共有する取り組み**がなされており、頻度の高い事例や影響度の高い事例などを選択して、**具体的対策を例示したハンドブック**を作成し、フィードバックに努めている様です。

福岡県では「**広域ネットワーク**」があり、水痘、おたふくかぜなど隔離が必要な病児を病児保育施設間で受け入れを融通し合っており、施設の有効利用に繋がっている様です。

今後、那覇市でも病児保育施設が増えてくれば、保護者にとって安心して子育てができる環境が整うと思います。

私個人的には、病児保育に興味を持っておりますが、場所の確保など多々クリアしなければならない点があり、4~5年先になりそうです。今後クリニックの改修も含めて具体的に検討していきたいと思っております。
(たまなは)

